



Title	シンポジウム「デザインの関西性について」
Author(s)	高井, 一郎
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 100-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シンポジウム：“デザインの関西性について”

パネラー／中根 清・佐藤宰治・桑畑周右・片山 功

コーディネーター／高井一郎

以上のメンバーでシンポジウムが行われた。

まず中根氏が松下電器産業の例をあげ、同社の製品開発の基本的態度について述べ、それは、あらゆる製品開発に当てはまるのではないか、即ちそれはユーザーニーズの発見と、デザインの独自性の重視にあると言えるのではないだろうか。このようなスタンスこそ関西のデザインの特長ではないだろうか、と述べた。

次いで佐藤氏は戦後の家電メーカーのデザイン発展の歴史をスライドによって示し、関西の各家電メーカーのデザインが、いかに独自で先進的な発展を遂げたかを示し、その実績は業界をリードしただけでなく、日本人の生活全体を変え、また輸出産業としても大きな力を持ち、国の経済発展に大いに寄与したことが述べられた。

次の桑畑氏は日本に於ける自動車の開発・発展の歴史——それは欧米に於いて既に大発展を遂げていた自動車および自動車産業に追いつくための努力の歴史であったが——を概観し、その頃すでに大阪の自動車メーカー、ダイハツ工業は大眾車の開発に力を注いでいたこと、およびそのデザイン開発の実例についてスライドにより示した。

最後の片山氏は、ミノルタカメラの製品開発の歴史をスライドによって紹介し、同社がいかに先進的な業績をあげたかを示した。それは時として市場のニーズより早すぎた開発であったため、販売実績がともなわない場合もあったが、同社のカメラが宇宙ロケット搭載に選定されるなど、記念すべき製品も多く

あった。

以上は4人のパネラーが、自己紹介を兼ねて、それぞれの立脚点に立った“製品開発・デザイン開発”についての事例の報告と、その基本理念についての見解であった。

次いで、本題の“デザインの関西性について”のディスカッションに入った。

紙面の関係で、その全てを記すことは出来ないが、4人のパネラーの論が、いずれも戦後の高度成長期をベースにしており、関西性という地域特性よりは、むしろ新しい機能や用途・造形の開発に全力を傾けてきたという印象が強い。

しかし、あえて言えば、実用主義・既成概念にとらわれない自由な発想・ユーザーニーズの重視などに、その特長があると見てよからうか。

しかし、それらは製品デザインの普遍的原則のようにも思われる。

コーディネーターから各パネラーに対して、上記の質問がなされたが、あるパネラーは製品デザインの理念は普遍的なものであり、関西性などはない、と答え、あるパネラーは関西性あり、と答え、意見が分かれた。

また、会場からの質問に対する答えとして、製品デザインに対する基本的な考え方は、インハウス・デザイナーとフリーデザイナーの立場の違いによって変わるものではなく、それは普遍的なものである。企業の形態やデザイナーの資質によって、状況は様々に変化するであろうが。と結ばれ、シンポジウムを終了した。

